「教育実習体験レポート」

[公立高等学校　保健体育]

授業から学んだこと

　実際に授業をしてみて感じたことが3つある。1つ目は「準備をどれだけやるかで授業の質が変わる」ということである。今回の教育実習では、保健の授業を6回、体育の授業を3回させていただいた。その中で保健の授業については、最初は準備不足で時間配分など、全体の要領がうまく掴めなかった。しかし、授業の回数を重ねるごとにどのような準備が必要で、授業全体のどの部分にメインを持ってくるべきかなどが分かるようになった。また、体育の授業では「テニス」を1時間目から3時間目までを担当したのだが、1時間目を行ってから、初めて、生徒の競技レベルや個人の能力が分かるため、それらを踏まえた上で、2・3時間目の準備をした。その際に、全体的な競技レベルをどの程度にして、どのように準備を進めていくかで、生徒の授業に対する取り組みが変わってくるということを感じた。

このように、「準備」を事前にどれだけ行うかで、授業の質が変わってくることを感じた。

　2つ目は、授業の中での「生徒との会話のキャッチボール」が大切であることを感じた。例えば、授業の中で、発表させたときに生徒の発言だけで終わるのではなく、その発言に対して、フィードバックを行ったり、もう少し意見を深掘りしたりし、生徒と積極的に関わっていくことが大切だと感じた。

　3つ目は、ICT 機器をうまく活用することで、活動的な授業が行えると感じた。この実習では、「パワーポイント、生徒専用タブレット、動画」を使って授業を行ってみて、パワーポイントに関しては字ばかりにならないように、表やグラフ、写真を提示し、イメージしやすくなるような工夫が大切だと感じた。また、実習校には、生徒一人ひとりが自分専用のタブレットを持っていたため、授業の中で、タブレットを使って調べ学習を行わせるようにした。こうすることによって、情報を読み取る力も身につき、更に、自分で調べたことなので、記憶にも残りやすくなったと考える。

　このように ICT 機器をうまく活用することで授業の理解度も高まったと感じた。

生徒との交流の中で学んだこと

　生徒との交流の中で学んだことは「一瞬のコミュニケーションの大切さ」についてである。教師の仕事は、一人ひとりの子どもたちのことを考え、丁寧に指導にあたることが大切であるが、丁寧な指導とは時間をかけてすることだけでなく、挨拶、視線、頷き、声の高さ、言葉など、短い間に交わされる子どもたちとの一瞬のコミュニケーションの機会を大切にしていくことが大切であると感じた。その積み重ねが、子どもたちの自尊感情を高め、目の前の課題に前向きに取り組んでいく力になることを学んだ。

職員室や教官室での様子から学んだこと

　職員室や教官室では、生徒の様子や様々な情報を交換し合っていたことが一番印象深い。また、先生同士で、上手くいかなかったことや逆に上手くいったことなどを伝え合っていたのも印象として残っている。先生方は教職員全員で生徒を見守るために、先生間での繋がりも大切にしているのだ

と感じた。

教育実習全般にわたって

　教育実習を通して、「報告・連絡・相談」の大切さを改めて感じた。私は「自分で判断しないといけない」という意識が日頃から強くあったため、実習中に何度か、相談をしておけば良かったなと思った場面があった。そのため、これから教育実習に行く後輩には「報告・連絡・相談」を先生方とこまめに行うようにしてほしいなと思う。また、指導案について、自分だけで全て書ける力を教育実習までに身につけておいてほしい。指導案に時間を取られて、授業準備に時間を費やせなくなることもあるので、指導案づくりのコツは掴んでおいたほうがいいと思う。

　３週間、教育実習に行って、自分の成長も凄く感じられるし、何よりも「教員になりたい」という気持ちが更に増した。本当に充実した３週間だった。